

〈アッシジの聖フランチェスコ〉を より楽しむために

小沼純一

読響は今年11月、創立55周年の一大プロジェクトとして、メシアン（1908～92）唯一の歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉に、常任指揮者カンブルランと挑みます（演奏会形式・全曲日本初演）。本公演に向けて、本誌ではメシアンに関する特集を「アッシジへの道」として連載しています。第5回の今回は、本公演をより楽しむために、アッシジの聖フランチェスコが題材の本や映画などを紹介します。（編集部）

アッシジの聖フランチェスコは、派手ではないながらも、もっとも人気のあるキリスト教の聖人です。清貧を説き小鳥たちとことばを交わす姿は、しばしば東洋的と言われることもあります。

メシアンのオペラは巨大な編成のオーケストラを要し、4時間を超える長大な作品です。しかし、そこにあるのは山あり谷ありのドラマではなく、地上的というよりは天上的な時間を聴き手が体験できる作品＝場です。

聖フランチェスコの人生をオペラはたどるわけではありません。八つのエピソードにかぎって、教会のステンドグラスのように提示します。そうした意味では、オペラだけではかならずしもこの聖人について知ることができません。聖フランチェスコのエピソードをいろいろ知っているキリスト教文化

圏と、そうしたものとあまり縁がないのとでは、どうしても違いがでてきてしまいます。ですから、あらかじめ聖人の全体像に漠然とでもふれておくといいのではないのでしょうか。

ちいさな絵本

聖フランチェスコについて知りたい、と尋ねられたら、すぐ脳裡に浮かぶ本があります。名作『パシユラルセ^{のうり}んせい』で知られる、はらだたけひでによる『フランチェスコ』（すえもりブックス、1992 現在は富山房インターナショナルより刊行）という絵本です。正方形の画面のなか、つねに淡い色調で、フランチェスコの姿はけっして大仰に描かれません。ことばはす

くなく、詩のようで、簡潔にこの聖人、いえ、人としての姿を伝えてくれます。手のひらよりすこし大きな判型で、この本じたいが「小鳥たちに」と献辞があります。小さく、また薄い本なので、何度も読みかえすのに適しています。

映画では

絵や図像があると「イメージ」がかたまってしまう、ということがあります。でも、それだけにイメージしやすくなったりする。ジョットやチマブーエが描いた聖フランチェスコ像は何百年ものあいだ、この聖人のイメージを、アッシジという土地の姿とともに、与えつづけてきました。

20世紀になると、絵よりも映画が、よりイメージをつよく残してくれるようになりました。そこでは生身の人が

聖人を演じてくれます。

『カサブランカ』『ホワイト・クリスマス』の監督 M. カートイスは『剣と十字架』（1961）を撮っています。『十戒』や『ベン・

ハー』のようにキリスト教とつながりのある映画はハリウッドでも多く作られ、これもそのひとつです。裕福な生まれの主人公が神の声を聴き、自らの道を歩む。そのあいだには親や友人との葛藤があり、教皇との会見があり、病いがある、最期が訪れます。わかりやすく、またエンタテインメントとしても観ることができる作品です。

ヴェルディのオペラ〈椿姫〉の演出でも知られる F. ゼフィレリ監督の『ブラザー・サン シスター・ムーン』（1972）は、自然の風景が美しく、またエン

ディングに法皇との会見を据え、ひとつの^{のど}希みの成就を描きだす青春映画です。いつもうたを口ずさんでいたという聖フランチェスコだからでしょう、フォーク＝ロック歌手のドノヴァンのうたが全篇にひびきます。

こうしたカラー作品に対して、白黒で地味ではありますが、もっとも中世イタリアの聖フランチェスコを、フランチェスコのみならずその「兄弟たち」を虚飾なく描きだしたのは、ロベルト・ロッセリーニ監督の『神の道化師、フランチェスコ』（1950）にほかなりま



『ブラザー・サン シスター・ムーン』
DVD発売中 1,429円＋税 発売元：NBCユニバーサル・エンターテイメント（7月1日現在）



『剣と十字架』
DVD発売中 1,800円＋税 20世紀フォックス・ホーム・エンターテインメント・ジャパン ©2011 Twentieth Century Fox Home Entertainment LLC. All Rights Reserved.

おおきな絵本

最後にもうひとつ、絵本を紹介して本稿を閉じることにしましょう。藤城清治『アッシジの聖フランシスコ』（女子パウロ会、2016）です。50代より上の方にとって、藤城清治の影絵は親しみのあるものではないでしょうか。今年93歳を迎えた画家が、昨年、21年の歳月をかけて完成させた絵本は、大判でドラマティック、どこかステンドグラスを想わせる色合いを持っています。



『アッシジの聖フランシスコ』
2016 ©Seiji Fujishiro/Horipro

おなじ聖フランチェスコといっても、そのあらわれはさまざまです。聖人をどのようにうけとったかによって、その描き方も変わってきます。そうした意味では、いろいろな人によるいろいろな聖フランチェスコにふれてみるといいのかもしれません。

（こぬま じゅんいち・
音楽、文芸批評家／早稲田大学教授）

次回は9月号に掲載します

せん。脚本は監督とフェデリコ・フェリーニの共同で、音楽を手掛けているのは弟のレンツォ・ロッセリーニ。フランチェスコを特権化せず、そばにいる人たちを大切にし、ともに清貧のなかで神に祈る生活を描いた名作です。

ことばで描かれた

多くのことばが聖フランチェスコに費やされてきました。13世紀の『黄金伝説』や『聖フランチェスコの小さな花』といった同時代のものから現在まで。ここでは小説をいくつか紹介してみしましょう。

まずよく知られている作家のなかでは、H. ヘッセ『アッシジの聖フランチェスコ』（全集第2巻、ヘルマン・ヘッセ友の会・研究会訳、臨川書店、2007）を挙げておきましょう。作家自身が共感をもっている作品として知られています。

明朗な性格だと伝えられる聖フランチェスコの苦悩する面を打ち出し、また、小説のつくりがしっかりしているのはギリシャ出身N. カザンツァキの『アッシジの貧者』（清水茂訳、みすず書房、1981）でしょう。

『『カナリアは人間の魂みたいだ』と、とうとう彼はつぶやいた。『周囲の檻の格子を見ているが、絶望せず、うた

っている。うたっていると、きっと、兄弟レオーネ、ある日、その歌が格子をうち砕くだろう』

兄弟レオーネが聖者について書き記すというスタイルをとっているこの小説は、作家自身が第二次大戦後にヨーロッパ各地を放浪せざるをえなかったことをも重ねているのかもしれません。

C. ボバン『いと低きもの 小説・聖フランチェスコの生涯』（中条省平訳、平凡社、1995）は比較的新しい本です。「彼は燕たちに話しかけ、狼たちと語りあう。石との集いに顔を出し、木々との討論会を開催する。全宇宙と話しあうのだ。なぜなら、すべての存在は愛のなかに言葉の力を持っているから、並外れた愛のなかではすべての存在に意味があるから」

小さな本ですが、フランスで賞も受け、多くの人に読まれたものです。ただストーリーを語るのではなく、聖フランチェスコのことをいろいろ考察しながら書きしるし、それはまた、20世紀末から現在に生きる人たちが自分のこととして考えることができるものになっています。

音楽で

メシアン以前でも、聖フランチェスコはいくつもの音楽に登場します。も

ともと音楽を愛し、のこされたのはわずかですが、詩も書いていたフランチェスコです、音楽とつながってくることに違和感はありません。もちろん小鳥との会話も、うた、だったのでしょうし。

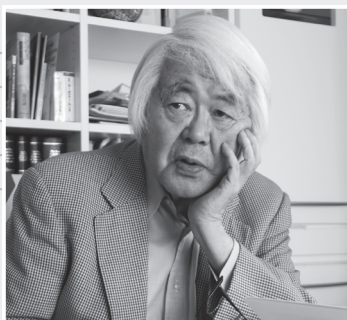
もっともよく知られているのは、リストのピアノ曲〈（二つの）伝説〉（1863）にちがいありません。この第1曲が“小鳥に説教する聖フランチェスコ”です。華やかなピアニストとして活動していたリストは晩年、1865年に僧籍にはいります。その頃には宗教的な作品がいくつも書かれ、聖フランチェスコのことは特に気に入っていたのでしょうか、ほかにも合唱曲があります。

プーランクには〈アッシジの聖フランチェスコの小さな祈り〉（1948）があります。敬虔なカトリック信者だったプーランクにはいくつも宗教作品がありますけれど、これはフランシスコ会の修道士だった甥ジェロームの依頼で作曲された男声合唱曲で、聖フランチェスコのことばがテキストとして用いられています。

グバイドゥーリナの〈太陽の讃歌〉（1997）も、聖フランチェスコのことばによっています。名チェリスト・ロストロポーヴィチの70歳を祝した作品で、その力づよさと確信に満ちたたびきがとても印象にのこる作品です。

日本とメシアン

● 船山 隆さんインタビュー



メシアンの〈アッシジの聖フランチェスコ〉日本初演（抜粋）は1986年3月12、13日、東京カテドラル聖マリア大聖堂で、小澤征爾の指揮、新日本フィルハーモニー交響楽団の演奏で行われた。初演に立ち会うため来日した作曲家は、3月14日に東京日仏学院で開かれた講演会で自作について熱弁をふるった。その時、聞き手を務めた音楽評論家の船山隆さん（東京芸術大学名誉教授）に、作曲家にまつわる思い出を語ってもらった。

メシアンを初めて見たのは1962年7月、出来たばかりの東京文化会館で、小澤征爾さんがNHK交響楽団を指揮して〈トゥーランガリラ交響曲〉を日本初演した時です。まだ大学生だった私は、終演後に小澤さんが客席に駆け降り、作曲家の手を取って舞台上上がる姿を4階席から目を凝らして眺めていました。

85年11月、京セラの稲盛和夫さんによって創設された第1回「京都賞」の思想・芸術部門受賞者にメシアンが選ばれ、ピアニストのイヴォンヌ・ロリオ夫人を伴って来日しました。作曲家の諸井誠さんと共に選考に携わった私は、夫妻を京都で出迎え、授賞記念シンポジウムの司会をしました。

メシアンのスピーチは堂に入ったも

のでした。作曲家のブーレーズ、シュトックハウゼン、クセナキスらそうそうたる教え子の名を挙げた後、こう言ったのです。「私は彼らの内的な聴取に細心の注意を払いました。私自身のことは忘れるように努力し、彼らの内部にリズム的な動揺を目覚めさせ、彼ら独自の道を発見するのを助けるように努力しました」。作曲家としてだけでなく、実に謙虚で理想的な教師でもありました。

自然と芸術の関わりを重視するなど日本人の自然観に共鳴するところも大きかった。メシアンにおける自然の象徴は鳥ですが、62年の初来日時に日本の鳥の鳴き声を採譜して作った〈七つの俳諧〉という作品があります。

メシアンの作品は、〈前奏曲集〉や

〈世の終わりのための四重奏曲〉などが作曲家の武満徹さんやピアニストの園田高弘さんらによる「実験工房」によって1950年代のはじめにいち早く紹介されました。また別宮貞雄さんや篠原真さんら直接師事した作曲家も大勢います。温厚な人柄で、夫人とも仲睦まじく、夫妻を^{むつ}梶尾の^{とがのお}高山寺に案内した際、首に巻いた夫人手編みの長いマフラーを盛んに自慢していたのが微笑ましかったです。

4か月後の86年3月、〈アッシジ〉日本初演のために再来日した夫妻を東京で迎えました。2回の公演に詰めかけた聴衆の熱狂ぶりはすごかった。翌日の講演会は当初、質疑応答の形で進める予定でしたが、聴き手の私が質問を差し挟む間もなく、メシアンは作品について熱弁を振るい、オペラの作曲を長年^{ちゅうちよ}躊躇していたものの、8年かけてようやく完成させたことなどを滔々^{とうとう}と語った後、こう締めくくりました。

「私は作曲家として困難に直面しています。それは第一にリズム、第二に鳥の声、第三に色聴、第四にキリスト教の信仰です。これらについて聴衆は十分に理解してくれないことが多い。しかし、それらは私にとって真実かつ真剣なものなので、聴き手がキリスト教徒でなくても何らかのメッセージは



1986年3月14日、東京日仏学院での講演会の様子
©林喜代種

伝わると思います。太陽が何であるかを知らずとも、陽の光を浴びれば、それを体で受け止めてしまうのと似ています」

あらゆることに誠実な人でした。講演会后、すぐ帰国するというので、「もっとゆっくり滞在されては」と申し上げたら、「いや、数日後に議会総選挙があるんだ」と。それがメシアンと直接言葉を交わした最後でした。

メシアンが亡くなって半年ほど経った92年12月、私はパリのオペラ・バステューでシルヴァン・カンブルラン指揮の〈アッシジ〉を観ました。劇場で偶然、ロリオ夫人と再会したのですが、私はその時、〈アッシジ〉を全曲聴き、初めてその真価に触れた気がしました。この20世紀最高のオペラの一つは、何度も繰り返し聴くことで、ようやくその真の姿を明らかにするのです。（聞き手・事務局）

心に残るクラシック

岸田 繁 ②

Shigeru Kishida

名付け得ぬ郷愁

エイトール・ヴィラ＝ロボス：ブラジル風バッハ



ラテン・アメリカ、とりわけブラジルにおいては、民俗音楽や伝統音楽と呼ばれるものが同時代のポピュラー音楽として発展を続けてきた、という歴史があると、作曲家の近藤浩平氏が述べている。これは「民俗音楽」や「伝統音楽」と「ポピュラー音楽」などとの区分けが欧米や日本とは異なる、ということである。

世界中を席卷するグローバリゼーションの波は、ポピュラー音楽産業にとっても例外ではなく、近年は欧米のポピュラー音楽が南米においてもシェアを拡大している事実がある。しかし現代において、ミナス地方などの新しいポピュラー音楽の潮流や、ジャンル分け不可能かつハイブリッドなクロスオーバーを行う新しいタイプの作曲家たちが、欧米にいる多くの音楽家たちに影響を与えているという事実もある。

それら多くの「同時代」に生きる作曲家たちは、クラシックやジャズ、欧米のポピュラー音楽や現代の電子音楽な

どの要素を、「伝統的」なブラジル音楽の器を使っていとも簡単に調理し、「名付け得ぬ音楽」を作り上げる。有名無名問わず、多くの音楽家たちにとってジャンルと呼ばれる垣根はない。

私の好きなクラシック音楽作品のひとつに、エイトール・ヴィラ＝ロボスの〈ブラジル風バッハ〉がある。合計9曲の作風は、それぞれチェロの八重奏だったり、ピアノ曲だったり室内管弦楽だったり、様々なスタイルのものだが、すべてに一貫しているのは、ブラジルのシヨーロ音楽やサンバなど、当時のポピュラー音楽だった民俗音楽の旋律やリズムを、対位法や古典音楽的な構築を巧みに使って組み立てたということだ。

多作であったヴィラ＝ロボスは、生涯に多くの作品を残しているのだが、その人生の中で15年もの長い時間を捧げたコンセプトチャルな作品である〈ブラジル風バッハ〉は、思いのほかバッハ的なバロック／古典派を想起さ

せる旋律や、サンバやボサノヴァを感じさせる意匠を感じたとしても、それが際立って目立つわけではない。しかし、この作品を聴いていると、いわゆるクラシック音楽作品からは普段感じることのない不思議な感触がある。

ヴィラ＝ロボスの音の手触りというか、耳当りは明らかにウィーン古典派のものであり、旋律そのものや、おそらく演奏上彼が意図したリズム（というよりブラジル音楽特有のグルーヴ）を度外視すれば、こういう作曲家がフランスにいたとしても不思議ではないくらい、構造そのものはソフィスティケートされたものであるように感じなくもない。しかしながら、アメリカ音楽に影響されたであろうドヴォルザークやバルトークのそれとは少し違う、作品全体の妙な据わりの良さと泥臭さがある。

ブラジルの歴史を紐解くと、ポルトガルから渡ってきた様々な文化や音楽は、イスラム圏のものが多かったという事実がある。アフリカからの奴隷や、インディオ文化を飲み込んだブラジルは、北米やアフリカ、ヨーロッパなど別の大陸の文化を早い時期に混ぜ合わせ国際化した、いわゆる文化の^{つぼ}坩堝なのである。

我々日本人が年末にベートーヴェン〈第九〉を聴いて郷愁にも近いものを感じることは、ヨーロッパ文化が、日本独自の何かと融合し化学反応を起こし、ひとつの「文化」として根付いたもの



ヴィラ＝ロボス〈ブラジル風バッハ〉（ナッシュヴィル響、ナクソスレーベル）のCDジャケット

だと考えるならば、それと同じなのかどうかはさておき、私がヴィラ＝ロボスの音楽を聴いた時に感じる、不思議な感触はもしかしたら、ポルトガル語で言うところのサウダージ、つまり^{どこ}何処かで^{つな}繋がっているかも知れないはずの、未だ知り得ないのに既視感のある風景、或いは名付け得ぬ郷愁のようなものなのかも知れない。ラテン・アメリカの人はもちろん、ヨーロッパの人も、北米の人も、アフリカの人も、中東の人も、アジアの人も、オセアニアの人も、もしかしたら同じようなことを感じるのではないかとさえ思ってしまう、「雑多」な文化の坩堝のような、不思議な音楽なのかも知れない。

ヴィラ＝ロボスのこの作品は、今の^{こんとん}混沌とした国際社会に向けられた、途方も無い大きなメッセージなのだと妄想するのは、少しばかり頭でっかちだと思うが、少なからず、心がふっと何処かに降り立ち、何らかの風景を眺めることができるような音楽である。

◎ソロ・チェロ奏者

遠藤真理

Mari Endo

温かい仲間たち
世界が広がりました

「遠藤さんは4月に読響に入団したニューフェイス。7月のプログラムでは土日マチネーで、ドヴォルザークのチェロ協奏曲を披露する」

この曲は少なくとも30回以上、オーケストラと演奏しています。初めて弾いたのは21歳の時、日本音楽コンクールに出た時で、上手く弾けたとは思わなかったのですが1位になりました。数年後、「プラハの春」国際コンクールの本選もハイドンのチェロ協奏曲第2番とこの曲でした。プラハ交響楽団の前奏が素晴らしい音色で、弦のトレモロが木の葉のすれあう音のように聞こえて、3分半ぐらいの間に、すっかり私の中に鮮烈なイメージが出来上がってしまったのです。もうコンクールなんていい、ここで弾けるだけで十分だと思って演奏しました。結果は(1位なしの)3位で、びっくり。私にとって思い出深い曲です。

この曲の聴きどころは、オーケストラが伴奏ではないこと。それが一番だ

と思います。どの楽器にも素敵なメロディがいっぱい出てくる。オーケストラだけ聴いても飽きません。3楽章にはコンサートマスターとの掛け合いもあります。なかなか余裕がないのですが、にこやかに演奏したいと思います。

「神奈川県出身。東京芸大卒業と当時にプロデビュー、オーストリア留学を経て、内外のオーケストラと共演(読響とは5回)してきた」

プロの演奏家として独り立ちしていくことがまだ想像できなくて。もっと自分を磨こうと留学しました。クレメンス・ハーゲンさんに師事したのですが、数か月間は曲を弾かせてもらえずボウイング、音階など初歩的なことばかり。でも、それがすごく良かった。難しい箇所も、こんな練習をしたら弾けるんだよと教わりましたね。そんな経験がプロとしてのその後に生きています。

ソリストとしてオーケストラと共演する時、だいたいこのオーケストラも1回のリハーサルですぐ本番です。「どう弾きますか」とお互いに探り合うわけですね。最初に読響と共演したのは2011年のサン＝サーンスの協奏曲でしたが、怖かったですよ(笑)。でも、今回は全然雰囲気が違う。非常に貴重な機会だと思います。お互いが



対話できるようリハーサルと本番ができるといいなと思っています。とても楽しみです。

「これまでずっとソロ活動だっただけに、オーケストラで交響曲などを演奏するのは、新鮮でしょう」

読響のチェロ・セクションは私をすごく支えてくれる。育てようとしてくれるのかもしれない。温かさを感じますね。セクションというのは大事ななと気付きました。私のようにオーケストラで首席を弾く経験がないのに受け入れてくれる態勢が出来ている。ソロ・チェロとしての先輩である毛利伯郎さん、嶺田健さんが染いてくれたものかなと思いますね。

読響にはいい演奏家ばかりで、室内楽的な要素が感じられます。私は首席としてはまだまだで、大変なことはた

くさんあるけど、とても楽しいです。音楽の世界が広がりました。

指揮者からは、すごく学んでいます。みんな指揮をものすごく良く見ている。テンポだけでなく、内面的なものまでね。指揮者の中には、その場にただいて音楽ができてしまうような方もいます。視線一つですべてを指示し、オーケストラを奮い立たせる存在感。ロジェストヴェンスキーさんもすごかった。不安な気配を感じると、何かを示してくれます。全部の情報を頭の中に叩き込んでいる人、天才ですね。だからあんなすごい音が出るんだと思いました。ロジェストヴェンスキーさんの中に流れる音楽は確かなもので揺らぎがないと感じます。

「NHK-FMのクラシック音楽番組「きらクラ!」でパーソナリティを務め、子供向けのコンサートにも力を入れている。子供たちにチェロの魅力をどう伝えますか?」

自宅で練習していると、私の娘は「ママの音うるさい」といいながらも、ずっとそばにいていつの間にか寝てしまいます。きっとチェロには心地よい振動があるんだと思います。子供たちにとっては大きな楽器なので「見ていても面白いと思うよ」と。あとは「大人数でチェロ・アンサンブルが出来ますよ」と。チェロ弾きの結束力は固いので、集まるとすごく楽しいです。

新世代の旗手・鈴木優人が振る〈未完成〉〈運命〉〈新世界〉

8/20 (日) 14:00 読響サマーフェスティバル2017《三大交響曲》
東京芸術劇場コンサートホール

シューベルト：交響曲 第7番〈未完成〉
ベートーヴェン：交響曲 第5番〈運命〉
ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉

指揮：鈴木優人



鈴木優人

世界的巨匠ルイーが指揮する R. シュトラウス〈英雄の生涯〉

8/24 (木) 19:00 特別演奏会
東京芸術劇場コンサートホール

8/25 (金) 15:00 特別演奏会
横浜みなとみらいホール

R. シュトラウス：交響詩〈ドン・ファン〉
ハイドン：交響曲 第82番〈熊〉
R. シュトラウス：交響詩〈英雄の生涯〉

指揮：ファビオ・ルイー



ファビオ・ルイー

世界へ羽ばたく若手ソリスト3人が《三大協奏曲》で競演！

8/28 (月) 18:30 読響サマーフェスティバル2017《三大協奏曲》
東京オペラシティ コンサートホール

メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲
ドヴォルザーク：チェロ協奏曲
チャイコフスキー：ピアノ協奏曲 第1番

指揮：海老原光

ヴァイオリン：キム・ボムソリ

チェロ：岡本侑也

ピアノ：ダニール・ハリトーノフ



海老原光



キム・ボムソリ



岡本侑也



ダニール・ハリトーノフ

お申し込み・
お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390
(10:00~18:00/年中無休)
ホームページ・アドレス <http://yomikyo.or.jp/>

8月 公演の聴きどころ

8月は、毎回チケットが完売する人気企画のサマーフェスティバル《三大交響曲》と《三大協奏曲》を開催する。20日の《三大交響曲》では、昨年6月に読響に鮮烈デビューした気鋭の指揮者鈴木優人が登場。〈未完成〉〈運命〉〈新世界から〉の三つの傑作交響曲を一気に披露する。鈴木は、指揮者及び鍵盤奏者としてバッハ・コレギウム・ジャパンや横浜シンフォニエッタをはじめ国内外の団体の公演に多数出演するほか、音楽祭での演出やプロデュース、作曲など、マルチな才能で注目を浴びている。“新時代の旗手”が名曲中の名曲をどう料理するのか、期待が高まる。

28日の《三大協奏曲》では、世界が注目する新進気鋭のソリストが次々と共演する。メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲では、ミュンヘン国際コンクールで最高位、ヴィエニャフスキ国際コンクールで第2位に輝いたキム・ボムソリが華麗なソロを奏でる。ドヴォルザークのチェロ協奏曲では、ドイツで研鑽を積み、エリザベト王妃国際コンクールで第2位に入賞したばかりの岡本侑也が登場。チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番では、2015年のチャイコフスキー国際コンクールで第3位に入賞し、指揮者ゲルギエフも認めた“ピアノ界の貴公子”ハリトーノフが類いまれな音楽性で聴衆を魅了する。こちらもフレッシュな才能である海老原光の指揮の下、若さあふれる熱い演奏にご注目を。

24日、25日の《特別演奏会》は、チューリヒ歌劇場音楽総監督、メトロポリタン・オペラ首席指揮者を務める世界的巨匠ルイーが読響に初登場する。2018年シーズンからフィレンツェ歌劇場の音楽監督への着任も決まっており、いま世界で最も注目を浴びるマエストロが、得意のR. シュトラウス〈英雄の生涯〉などで渾身のタクトを振る。作曲家自身をテーマに描いたとされるこの曲は、4管編成の大管弦楽によって奏でられる。イタリア出身の巨匠らしい熱い「うたごころ」と、輝かしいハーモニーをご堪能いただきたい。

(文責：事務局)

読響チケットWEB

検索

ポーランドの名匠カスプシクが〈展覧会の絵〉で渾身のタクト

9/1 (金) 19:00 第605回 名曲シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ヴァインベルク：ポーランドのメロディ
フィリップ・グラス：ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲
ムソルグスキー（ラヴェル編）：組曲〈展覧会の絵〉

指揮：ヤツェク・カスプシク

ヴァイオリン：ギドン・クレーメル チェロ：ギードレ・ディルヴァナウスカITE



ヤツェク・カスプシク

世界的ヴァイオリニストのクレーメルが31年振りに登場

9/6 (水) 19:00 第571回 定期演奏会
東京芸術劇場コンサートホール

ヴァインベルク：ヴァイオリン協奏曲 ショスタコーヴィチ：交響曲 第4番

指揮：ヤツェク・カスプシク ヴァイオリン：ギドン・クレーメル



ギドン・クレーメル

欧州で注目を浴びる新鋭マイスターと天才トリフォノフが共演！

9/16 (土) 14:00 第200回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

9/17 (日) 14:00 第200回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

9/18 (月祝) 14:00 第98回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

スッペ：喜歌劇〈詩人と農夫〉序曲 プロコフィエフ：ピアノ協奏曲 第2番
ベートーヴェン：交響曲 第6番〈田園〉

指揮：コルネリウス・マイスター（首席客演指揮者） ピアノ：ダニエル・トリフォノフ



コルネリウス・マイスター

“チーム長原”が繰り広げる極上のアンサンブル

9/19 (火) 19:30 第15回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00開演 完売

《長原幸太らによる室内楽》

ベートーヴェン：交響曲 第8番（弦楽五重奏版）

ブラームス：弦楽六重奏曲 第1番

ヴァイオリン：長原幸太（コンサートマスター）、瀧村依里（首席） ヴィオラ：鈴木康浩（ソロ・ヴィオラ）、渡邊千春 チェロ：高木慶太、富岡廉太郎（首席／契約団員）



長原幸太

練達のマエストロが振る〈新世界〉&実力派・小山が弾く〈皇帝〉

9/30 (土) 15:00 第6回 パルテノン名曲シリーズ
パルテノン多摩大ホール

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第5番〈皇帝〉

ドヴォルザーク：交響曲 第9番〈新世界から〉

指揮：ハンスイェルク・シェレンベルガー ピアノ：小山実稚恵



ハンスイェルク・シェレンベルガー

20世紀を代表する傑作オペラ、遂に全曲日本初演！

11/19 (日) 14:00 第572回 定期演奏会
サントリーホール

完売

11/23 (木祝) 13:00 メシアン：歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉
（びわ湖ホール・読響 共同主催）びわ湖ホール 大ホール

11/26 (日) 14:00 第606回 名曲シリーズ
サントリーホール

完売

メシアン：歌劇〈アッシジの聖フランチェスコ〉

（演奏会形式／全曲日本初演）

指揮：シルヴァン・カンブルラン（常任指揮者）

天使：エメーケ・バラート（ソプラノ）

聖フランチェスコ：ヴァンサン・ル・テクシエ（バリトン）

合唱：新国立劇場合唱団、びわ湖ホール声楽アンサンブル ほか



シルヴァン・カンブルラン

伝説的ドラマーが奏でる〈ドラムス協奏曲〉&名曲〈ボレロ〉

12/2 (土) 14:00 第201回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

12/3 (日) 14:00 第201回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

バーンスタイン：〈キャンディード〉序曲

ターネジ：ドラムス協奏曲〈アースキン〉（日本初演）

ガーシュイン：パリのアメリカ人

ラヴェル：ボレロ

指揮：ディエゴ・マテウス

ドラムス：ピーター・アースキン



ディエゴ・マテウス



ピーター・アースキン

こんなに便利！ 読響チケットWEB

読響チケットWEBは、インターネットから読響のチケットをお求めいただける専用ウェブサイトです。24時間いつでもお申し込みができ、ご自身で好みの座席をお選びいただけます。

以下のURLもしくは公式ウェブサイトのトップページ【読響チケットWEB】のボタンから、ぜひご利用ください。

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

※初回お申し込み時は利用登録（無料）が必要です。